

2006年9月17日 聖霊降臨節第16主日礼拝

『漕ぎ悩んでいると』

(イザヤ43章16～20、マルコ6章45～52)

人生は、よく舟の旅路にたとえられます。新しい人生の船出とか、人生の荒波にもまもれて...などと言ったりします。イエスの弟子たちも、度々、荒波のような試練に遭遇しました。

主イエスは「弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸のベトサイダに行かせ」ました(マルコ6章45)。ただしこの舟には弟子たちだけが乗っていて、主イエスはそこにいません。主は弟子たちと別れて、祈るために一人、山に登られたからです。やがて夕方となりました。弟子たちを乗せた舟は、湖の真ん中までやってきています。ただ主イエスだけが、陸地に残っておられます。そこに突然、激しい風が吹きつけました。ものすごい嵐が、湖を襲ったのです。弟子たちは何とか舟を操ろうとしますが、逆風のため、思うようにできません。夜明けまで一晩中、嵐と格闘しますが、なすすべもありません。このままいけば、舟は間違いなく沈んでしまうでしょう。弟子たちは、一体どうなるのでしょうか？

このときの嵐が、どれほど激しいものであったか。そのことは、弟子たちが一晩中格闘しても無駄であったことからわかります。主イエスの弟子の中には、元漁師が三人はいました。ペトロとヤコブとヨハネです。漁師というのは、何代にもわたってその土地に住み着き、魚を捕って暮らしています。ですから、その土地の自然や気候などは知り尽くしているのです。この季節なら、どの方向から風が吹いてくるか。嵐が来る兆しなど、何代も前から語り継がれた生活の知恵で、いろいろ知っているのです。わたしの親戚に海つりの大好きな人がいますが、プロの漁師に釣船をたのむと、ときどき思いがけないことがあるそうです。今日はこんなによい天気だから、よく釣れるだろう。そう思って出かけるのですが、実際舟を出すときになると、漁師さんが、今日はだめだ、海が荒れるから出さないほうがいい。そんなこといわないで、よい天気だから。そういつて無理に出してもらおうと、案の定、いわれた時間になると急に天気が悪くなって、「ほら、言ったとおりでしょう。早く帰りましょう」と漁師さんに言われてしまう。そういうことが、ときどきあるそうです。その土地に何代も暮らしている、プロの漁師とは、そういうものです。

ところが、このときの弟子たちの様子といったら、どうでしょう。天気や自然を知り尽くして、舟を操ることにかけては誰にも負けない。漁師としての経験も、力量も、腕力も、自信がある。そう自負してはばからないプロの漁師が3人もいながら、嵐が来ることすら見分けられなかった。激しい逆風の中、まるで赤子が腕をひねられるように、何もなすすべはありませんでした。弟子たちをおそった試練が、どれほど思いがけないものであったか。プロの漁師も太刀打ちできないほどの恐ろしい試練が、彼らを襲ったのです。

わたしたちも、同じように試練におそわれることがあります。どんな人生の達人も、ふるえあがるような試練。信仰の達人だと自負し、また人から思われている。そのような信

仰者をも、飲み込んでしまいそうな嵐に、わたしたちも出会うのです。そのとき、一体わたしたちに何ができるのでしょうか？ ただ「神様、お助けください」と叫ぶことしかできないでしょう。でも、神様に向かって、「助けて」と叫ぶことのできる人は幸いです。本当に困ったとき、辛いとき、身の破滅を予感させられるときに、真に頼りになる御方を見いだせる人は幸いです。

さて、弟子たちはどうしたでしょう？ あの激しい嵐の中で、彼らは、「主よ、助けてください」のひと言さえ言えませんでした。それほど、弟子たちは恐ろしい思いをしていたのかもしれませんが。あるいは何とか自分たちの力で、事態を打開しようとしていたのか。必死のあまり、主イエスを求めることなど、どこかに置き忘れてしまっていたのでしょうか。

そんなときでした。弟子たちのところに、主イエスはやって来られました。「逆風のために弟子たちが漕ぎ悩んでいるのを見て、…（主イエスは）湖の上を歩いて弟子たちのところに行き、そばを通り過ぎようとされた」（48節）。ところがこのとき、「弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ」（49節）。せっかく主イエスが助けに来てくださったのに、弟子たちは気付かない。それどころか、「出た～、おばけだ」と叫んで、「どうかわたしたちに災いを与えないでください」と怯えるばかりです。50節には、はっきりこう書いてあります。弟子たちは「皆イエスを見ておびえたのである」。

この弟子たちのあり様こそ、わたしたちの姿ではないかと思うのです。せっかく主イエスが助けに来てくださっているのに。しかも激しい嵐と荒波を踏み越えて、主ご自身がやって来られたのに、わたしたちはそれに気付かない。恐ろしい試練に飲み込まれて、神様に助けを求めることすら忘れてしまう。そんな弟子たちを、主イエスは助けにやってこられたのに。弟子たちは、それが主イエスだとは気付かず、幽霊だと見間違っ、恐れあまり叫び声を上げる。ここに、弟子たちの不信仰、わたしたちの信仰の乏しさが、浮き彫りにされていないでしょうか。われわれも、この弟子たちと何ら変わるところはありません。自分の力に頼るあまり、神に祈ることを忘れてたり。祈りはしたけれども、実際に主イエスが助けの手を差し伸べると、「それは違う、神様の助けとはもっと何か別の、こういうものだ」と勝手に決めつけてしまう。自分勝手な思いこみがじゃまをして、せっかく差し伸べられた救いの手を払いのけてしまうことがありはしないでしょうか。そんなわたしたちです。ところが聖書は、はっきりと証言しています。そのようにふがいなく、信仰すらあやしい弟子たちに、主イエスは間違いなくお姿を現わされました。そればかりか、ご自身を救い主と認めず、恐れまどう弟子たちに、進んで声をかけてくださいました。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と（50節）。この主の御声を聞いて、ようやく弟子たちにもわかりました。神様が、わたしたちを救い出すために、救い主キリストをお遣わしくくださったことを。ようやくわかって、この方を信じることができました。そして、主イエスを見出した弟子たちは、最後に主イエスを舟の中にお迎えしました。

すると不思議なことに、今まで荒れ狂っていた波が嵐が、ぴたりと止んだではありません

んか！ 「イエスが舟に乗り込まれると、風は静まり、弟子たちは心の中で非常に驚いた」（51節）。

このときの弟子たちの様子を、マルコの福音書は、このように記しています。「パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである」（52節）。これまで主イエスが度々起してくださった奇跡を、弟子たちはまだ本当の意味で理解できていませんでした。心が鈍くなっていたためです。しかし、心鈍い弟子たちを、キリストはお見捨てになりません。それどころか弟子たちに、大切なことを教えておられます。いつ、どのような試練がおそってきても、わたし（イエス）は、あなたを助けに来る。たとえあなたがわたしに気づかず、わたしを拒み、わたしをはねのけても、わたしはあなたを救い出す。これこそ、主イエス・キリストのなせる御業です。

なぜ弟子たちはそれほどに、心が鈍くなっていたのでしょうか？ 主イエスを見てもわからなかったのは、なぜでしょうか？ おそらく、こういうことだったのでしょうか。舟に乗って嵐に遭っているのは自分たちだ。イエス様はここにはいない。イエス様は一人、安全な陸地で、山の上で祈っておられるのであって、舟の中にも自分たちのそばにも、主イエスはおられない。苦しんでいるのは自分たちだけだ。だから自分の力で、なんとかしなければならぬ。そうした思いに捕らわれていた弟子たちではなかったでしょうか。

しかし、それは大きな間違いです。弟子たちは、大きな間違いを犯していました。本当に自分たちだけなのか？ 山にいる主イエスは、湖の真ん中に来ることなどできないのでしょうか？ いいえ、主イエスはくるのです。キリストには、それができるのです。どれほど激しい嵐でも、湖の真ん中でも、試練に悩む弟子たちのところに、キリストは来られます。荒波を踏み越えて、主は、わたしたちのところに来られます。たとえわれわれが、どれほど神様から遠く離れたところにいようと、どれほどの隔たりや障害があろうとも、キリストの手の及ばない所など、この世にありはしません。

こうして弟子たちは、試練の真ん中で、主イエスの大いなるご支配と力を、見ました。経験しました。いつもイエス様のそばにいて、偉大な奇跡をその目で見、主イエスが語られるみ言葉を、すぐそばで聞いていた弟子たち。けれども今このときまで、イエス様のすごさを知りませんでした。しかし今、彼らは知りました。試練を経験する中で、主イエスの力強さ、救いの確かさを知りました。それらを一つ一つ、これからも知っていくのです。試練の中でキリストと出会い、キリストと結ばれていくなかで、弟子たちは次第次第に、本物へと変えられていくのです。

弟子たちが乗り込んだ舟。あの舟こそ、教会です。そしてわたしたちの教会は、イエス・キリストの体でもあります。主が宿ってくださる神殿なのです。しかし、もしキリストがおいでくださらないなら、わたしたちは無力です。教会もわたしたちも、何もすることはできません。もし主イエスがおいでくださらなければ、わたしたちの舟は沈むほかはないのです。しかし主がおいでくださるなら、わたしたち一人一人も、教会も生き返ります。主をお迎えすると、力が与えられます。そこから前進も始まります。この方をお迎えする

以外に、わたしたちの歩みも前進もありません。この御方をお迎えすること、それこそが世界中の教会とキリスト者の、唯一の力の源なのです。

ですから、たとえ今どれほどの修羅場に身を投じることになろうとも、主を信じようではありませんか。事実、主イエスのおられない所などありませんから。試練のときこそ、主イエスを求め、主イエスを見出し、主イエスをお迎えしましょう。わたしという人生の舟に、教会というわたしたちの真ん中に、救い主キリストを迎え入れるのです。そうするなら、舟のかじ取りいっさいは、主イエスが握ってくださいます。すべてのすべてを主にまかせする。信仰の勝利は、まさにここから始まるのです。祈ります。

[説教者：堀地正弘牧師]